

“足で確かめた東京の文学遺跡”

続 東京のかおり

鈴木 章 監修 浦和市教育研究会国語部 編

続東京のかおり／足で確かめた東京の文学遺跡

平成二年二月二十五日 初版第一刷発行

定価 一、五〇〇円

監修 鈴木 章

編集 浦和市教育研究会国語部

浦和市常盤六一四―四

浦和市教育委員会指導課内

電話 〇四八(833)〇四一一

発行 株式会社 さきたま出版会

浦和市高砂二一―十七

電話 〇四八(822)一二二三

印字・小倉編集工房／印刷・関東図書株／製本・牧製本印刷株

ISBN 4-87891-039-9 C1395 P1500E

埼玉大学
名誉教授 鈴木 章／監修
浦和市教育研究会国語部／編

続 東京のかおり

—— 足で確かめた東京の文学遺跡 ——

さきたま出版会／発行

目次

私の小学時代……………	鈴木 章……………	7
-------------	-----------	---

一 湯島聖堂より上野公園王仁碑まで……………	19
------------------------	----

湯島聖堂 神田明神 妻戀神社——「松葉巴」の舞台
湯島大神 『雁』などの舞台 花柳寿美の扇塚の詩碑
「かなりや」の詩碑 時の鐘 上野東照宮 清水観音堂

二 雑司ヶ谷靈園より関口芭蕉庵まで……………	43
------------------------	----

雑司ヶ谷靈園 大町桂月居宅跡 窪田空穂・章一郎居宅
佐藤春夫居宅跡 芭蕉庵

三 我孫子界限と南千住付近……………

63

我孫子 杉村楚人冠旧居と楚人冠公園 志賀直哉邸跡
滝井孝作「無限抱擁」執筆の地 中勘助仮寓跡 武者小路実篤旧居 小塚原回向院 芭蕉碑——素盞雄神社
芭蕉碑（千住大橋公園）

四 早稲田より新宿俳句文学館まで……………

85

島村抱月居宅跡 月桂寺・池辺三山の墓 永井荷風居宅跡（断腸亭跡） 綱島梁川居宅跡 坪内逍遙居宅跡、文芸協会演劇研究所跡 島崎藤村居宅跡 小泉八雲居宅跡 藤村妻子前墓地（長光寺） 岡本綺堂居宅跡 俳句文学館

五 山吹の里より落合秋艸堂跡まで……………

107

山吹の里碑 江戸川乱歩旧居跡 島村抱月旧居跡 志賀直哉旧居跡 堂盤館——太宰治の学生時代の最初の下宿 林芙美子旧居 落合秋草堂跡（会津八一旧居跡）

六 染井靈園よりハチロー記念館まで……………

129

染井靈園 芥川龍之介墓（慈眼寺） 啄木・弓町の間借りした家の跡 菊富士ホテル跡 徳田秋声居宅 サトウハチロー記念館

七 白山上より一葉桜木の宿まで……………

143

武田泰淳生家——潮泉寺 齋藤緑雨の墓——金龍山大円寺 「虞美人草」執筆の地——漱石旧居跡 桜木の宿——一葉幼時居住跡

八 両国橋より業平橋南北墓まで……………

155

両国橋 回向院——江戸文芸者の墓 吉良邸跡——赤穂義士討入の舞台 勝海舟生誕の地 芥川龍之介旧居跡 伊藤左千夫を訪ねて 龍眼寺（秋寺） 春慶寺

九 数寄屋橋より聖路加病院まで

177

透谷・藤村記念碑 啄木歌碑 交詢社 資生堂（「縮
図」の舞台） 新橋会館 金春屋敷跡 旧新橋横浜間
鉄道創設起点跡 築地小劇場跡 芥川龍之介生誕の地
浅野内匠頭邸跡 蘭学事始めの地・慶応義塾の地

十 市ヶ谷より旧護持院ヶ原まで

199

有島三兄弟居住跡 明治女学校跡 泉鏡花居宅跡 武
田麟太郎居住跡 滝簾太郎居住地跡 塙保己一の和学講
談所跡 皇居東御苑 平将門首塚 「護持院ヶ原の敵
討」の舞台

主要参考・引用文献一覧

221

あとがき

222

編集協力者一覧

224

私の小学校時代

鈴木 章

前にも書いたが、私が学んだ学校は神田の錦華小学校である。もっとも卒業はしていない。関東の大震災で学校も家も焼けたからで、卒業したのは淀橋の第五小学校である。淀橋第五は今はないが（人に教えられて知ったのだが、淀橋では第五は欠番になっていて、四から六へと番号が飛んでいるとのことである）、錦華の方は今もある。場所も当然のことだが昔と変わらない。

今、靖国通りと言っている大通りが、駿河台下を過ぎて九段のほうへ大きく左折するところを、そのまま真っすぐ水道橋に抜ける、昔は猿樂町通りと呼んだ通りがある。その通りをおよそ二百メートル行った右側に錦華小学校は、昔もあったし今もある。もっとも建物は昔とまったく違っている。今は、どの学校もそうだけれども、鉄筋コンクリートの建物になっている。外の学校に比べると、ひいき目かもしれないが、やや趣があるように思えるが、昔のあの感じは全くない。

あの感じは、校舎よりもむしろ校門にあった。校舎は片仮名のワの字を逆さまにしたような格好で、ただ両翼が少し広がっていて、そして正面に向いた方はかなり狭いといった作りである。木造二階建

ての建物で、それだけでも四隣を圧倒する趣があつたが、それにもまして、今言つたように校門がすばらしかった。

校門は、昔の奉行所や関所の門といった感じで、いかめしいの一言に尽きるものであつた。明治五年創立当初からのものかどうかその点は明らかでないが、真つすぐに立つた二本の柱に、これも真つすぐに横木が渡され、そして柱にも門扉にも随所に金具がはめ込まれていた。だから夜更けなどびつたり閉された校門の前を通ると、一瞬こわいという感じを受けるのであつた。後年、其角の句に「此の木戸や錠の鎖されて冬の月」というのがあるのに出会つた時、すぐ頭に浮かんだのは、この錦華の門であつた。

錦華の門は、恐らく小使（用務員）さんの手で朝夕開け閉めされたのであると思う。私たちが朝八時ちょっと過ぎに登校すると、もう門は開いていた。そして夕方先生が全部帰つた後、時間はわからないがきちつとそれは閉められた。だからそこには自由を拘束する何かがあつたような気が今もしてならないのである。もっとも時代は正である。デモクラシーが叫ばれ、自由教育が提唱され実践された時である。従つて学校生活全体は確かに自由の氣に満ちていた。しかし門には自由を頑として認めない、明治教育の名残りが存していたように思われてならないのである。

*

錦華にあつたかもしれない明治教育といえ、私はすぐに二つのことを思い浮かべるのだが、そのことを語る前に、私が錦華に入学するようになった経路に触れておきたい。

私は、これも前に書いたと思うが、群馬の田舎から上京した両親が、下谷の御徒町に住んでいた時に、そこで生れたのだが、生後一年ほどで（いつだかはっきりとはわからない）神田に移り、小川町三十八番地に住むようになった。それがまた、多分学齢に達する前年だったと思うが、同じ神田の表猿楽町二番地に移った。そして翌年錦華小学校に入学したのである。

当時も学区制はあった。錦華の学区は猿楽町、神保町であって、その町以外の者は原則として錦華に入学することはできなかった。錦華は、今でもそうだが、下町の公立の名門校であるから原則はそうであっても、法網をくぐって錦華に入学する、あるいはさせる者がかなりあった。私のクラスにも十人近くはいたように思う。私は一年前から表猿楽町の住民になっていたのだから合法的に錦華に入学したのだが、しかし今思うとこれは全く母の計画的な行爲のおかげなのである。先に述べたとおり、私たち一家は小川町三十八番地に五年ほど住んだ。もしも私一家がそのままそこに住み続けたなら、私は小川小学校に入学せざるを得なかったのである。小川町に移り住んだ当初は、恐らく母は錦華のことも、学区制のことも知らなかったに違いない。しかしいつかそれを母は知った。そこで私が学齢に達する一年ほど前に父に勧めて表猿楽町に居を移したのである。恐らくそれに間違いない、と私は思っている。そしてそのことについて私は母に敬意を表するものである。

*

さて二つのことだが、二つとも体罰で、一つは私が受けたもので、もう一つは友人が受けたものである。そして私は担任の先生から、友人は校長先生から受けたのであった。しかも入学して間もない

一年の時にである。一年竹組の担任はMという先生であった。三十をちょっと過ぎたぐらいのまだ若い、痩せた神経質な先生であった。だから何か近寄りがたいものがいってもその身边に漂っていた。そのM先生に私はひどい体罰を受けたのである。何をしたためにそういう目にあったのか今もってわからないのであるが、ある時私は土井君という友人と教壇の前に先生の方を向いて立たされ、鞭で何回か先生に頭を叩かれたのである。叩き方はいやっというほどではなかったと思うが、痛いことは痛かった。私は思わず涙を流した。土井君は流さなかった。それが先生の目に入ると、とたんに先生の怒りは極点に達した。そして先生は、土井はよしと言って彼を席に戻し、私一人を残して、この程度のこととて涙を流すやつがあるか、男らしく振る舞え、といった意味のことを私に言って、また鞭で頭を叩き始めた。しかも今度は前よりもっと強くであった。私は先生にたしなめられたこともあり耐えに耐えた。ようやく先生の許しが出た。そして私は席に戻ったのであるが、戻ってからそっと頭に手をやってみると、頭がコブだらけであった。

もう一つの、友人が校長先生から受けた体罰というのは、彼が背負い投げを校長先生から食ったことである。ここでまた脇道に入るが、錦華には校長宿舎があった。門を入った右側の植込みの陰にそれはあった。平屋であることだけはわかるが、どんな建築であり、どんな間取りであるかわからないように嚴重に囲われていた。もちろん一家の生活ぶりなど外からは全く見ることはできなかった。それほどに世間と隔絶した暮らしであった。校長先生はその宿舎から毎日登校されたのであるが、さてそのK校長先生がなさったことである。竹組に私と同姓で名前だけ違う友人がいた。彼は恐らく甘や

かされて大事に育てられたのであろう、大変なわがまま者であった。気に入らないことがあったり、何か急にしたくなったりすると、不意に立ち上がり、ドアを開けて廊下に出て行ってしまふ。時には荷物をまとめてさっさと家に帰ってしまうこともあった。M先生は、彼の指導に恐らく随分と苦勞されたに違いないが、不思議なことに私や土井君を叩いたような手荒なことは一度もしなかった。それをM先生に代わってなさったのが校長先生であった。

ある日、例によつて私と同姓の友人は急に立ち上がり、荷物をまとめてドアを開けて出て行つた。それと前後して（と言うのは、その氣配を感じて彼よりも先にM先生が教室を出たのか、それともドアを開けて出て行く彼の後を追つてM先生が教室を出ていったのか今はっきりしないからだ）M先生は授業を中断して教室から姿を消した。何秒か、何十秒か、あるいは一、二分かがこうして過ぎた。突然けたたましい悲鳴が湧き起つた。血相を変えて教室を出て行くM先生の姿にも私たちは氣押されたが、それ以上にその悲鳴は私たちを圧倒した。私たちは一瞬息を呑んだ。悲鳴に続いて、ドタドタと廊下を渡ってくる大人の足音がした。足音は一人の足音ではなく、複数の人間の足音であり、しかも何か引きずっている物音までした。やがて開いたままのドアから私たちに事態がはっきり読み取れた。K校長先生とM先生とが、私と同姓の友人を片手ずつ持つて教室に連れ戻そうとしているのであり、友人は必死にそれに抵抗しているのであった。

さて、教室の前まで彼を強引に連れ戻した両先生はどうしたであろうか。ドアの前まで連れ戻すと、校長先生は、いきなり彼を肩にかついで廊下に真つ逆さまに投げ落した。ドシンという音と、一段と

高い彼の悲鳴が私たちの心を完全に氷つかせた。この事があってから彼のわがままはおさまったけれども、このことは私たちの心にいつまでも消えない傷となって残るようになってしまったのである。

もっとも、だからといって私はM先生を恨んだり、K校長先生を憎んだりしてはいない。校門に象徴される錦華の伝統の重みについて具体的に述べているだけなのである。そういえば、聞いたところによると、錦華からは陸海軍の軍人がかなりたくさん出ているそうである。そういう人が出ているか具体的にはわからないが、それはかなりの数に上るらしい。ここにも錦華の伝統は生きているといえるのである。

*

さて、どういうわけかM先生は一年で錦華を去り（多分転勤したのであろう）、二年からはU先生が竹組の担任となった。U先生はM先生のように生徒の心をびくつかせ、萎縮させる型の人ではなかったが、近寄りがたいものをやはり持っていた。先生はいつも静かに生徒をさとされた。その口調が物静かであるだけに、それに指摘が的確であるだけに、先生の訓戒は幼ながらに身に泌みた。私に一つの経験がある。

五年生の時のことと覚えているが、図画の授業で教室を出で校舎の写生をしたことがあった。素材は校舎と決められていたが、構図その他は一切生徒の自由であった。私は画面の中央やや右に正面玄関を位置させ、それに従属する形で左側校舎を続かせる、という構図を考えた。（そのように描くためには校長宿舎の垣根の近くに身体を置かなければならなかった。それがちょっと気になったことは

事実である。) 絵は出来上がり、次の時間に先生の講評があった。私の絵についての先生の講評はみごと(?)であった。それは私の心にぐさりと突き刺さった。先生はおおよそ次のようなことを言われた。

鈴木君の絵はなかなかよく描けている、一番いいのは構図だ、玄関が十分生かされている、左側の校舎の描き方が遠近法になっているのもよい。ともかく皆の描いたものの中で一番の作と言えるが、ただ一つこの絵にはうそがある。それは窓にある。鈴木君はどの窓ガラスにも青い斜線を数本入れているが、これはうそだ、このうそがせっかくの絵を台なしにしている、これからはこんなうその絵を描かないで、本物の絵を描くようにしなければならない。

先生の専攻が何であったか私は知らないけれど、この私の絵の評はみごとであった。実は窓ガラスに青い斜線を入れたのは、「少年倶楽部」か何かの挿し絵にそう描いてあったのをまねたのであって、実際に私の目に窓ガラスがそう見えたわけではない。そこをみごとに先生は突かれたのであった。物静かだがU先生はこわい人であった。しかし印象に残る方でもあった。

*

印象に残ることとか先生ということになると、淀橋第五にも触れないわけにいかない。そこで第五の方に話を移したいと思う。前にも書いたように、第五は靖国通りの地下に埋まってしまっていて今は無い。それは永久欠番校に今なってしまうているが、その第五に震災で焼け出されて、角筈に住むようになった私は、六年二学期の十月から通学するようになった。そして翌年の三月まで在籍してそこを

卒業したのである。

第五はどの学年も男女一組ずつの小さな学校であった。錦華に比べると何もかも貧弱であった。生徒の服装も緋の着物に袴というのが多く（袴をはいていない者もなかにはいた）、全体に田舎っぽかった。田舎っぽいいと言えば新宿全体が実はそうであった。新宿通りは、市電が通ってはいしたが、まだ道は舗装されておらず、そして両側の店屋はどれも古い作りの建物だった。中村屋、高野は当時すでにあったけれど、今のものとは全く違ってたずまいであった。最も今と違うのは紀伊國屋である。紀伊國屋は当時は炭屋であった。それもあまり目立たない炭屋であり、隣りの石屋の方がずっととりっぱではなかったかと思う。ともかく内藤新宿と呼ばれた時代のおもかげの残る宿場町で新宿はまだあったわけなのだが（わずかに武蔵野館だけが新しい時代を思わせた）、その新宿と第五とが今の私にはむしろなつかしいものになっているのである。

もっとも私の角筈の暮らし、学校生活はそのすべてが楽しかったとはいえないのである。私の組には私を入れて三人ほど、家を焼かれて第五に転入したものがいた。淀橋に生まれ育ち、一年の時から第五に通っている生徒にとっては、私たちはいわばよそ者であり、飛び入りであった。だからこどもながらに彼らは私たちにある特別の感情を持っていた。これは疑いを入れない事実である。そのことは、「避難民」とか「焼け出され」という言葉が時々彼らの口から漏れたことによっても明らかである。そういうわけで、私は彼ら「譜代」の生徒とは、いっしょに同じ高校に進んだ斎藤君という君とだけ交わっていた。そして互に行ったり来たりしていた。もう一人私が親しくした野口君という君

は京橋で焼け出された生徒で、彼と親しくなったのは、斎藤君の場合と違って被害者意識みたいなものが作用したのではなからうかと思う。(斎藤君は旧制高校の二年の時胸を煩って死んだ。死ぬ少し前鶴沼に転地療養していた彼を訪ねた。細い手でしっかり私の手を握ってしばらく離そうとはしなかった彼の顔が私の心に今も焼きついている。野口君は中学を経て、斎藤君や私が入った学校とは別の旧制高校に進み、東大工学部卒業後は三菱造船所に一貫して勤務して、現在は悠々自適の生活を送っている。)

*

いや、第五についてはこんなことを書くよりもっと大切なことを書かなければならなかったのだ。それは担任のS先生のことである。S先生は、錦華のM先生やU先生のように近寄りがたい感じの方ではなかった。むしろ親しみやすい方であった。しかし、だからといって生徒を甘やかすようなところは全くなかった。先生は一途で、情熱的な方であった。そして小まめに生徒の面倒を見て下さった。第五は六年の二期から進学組と就職組とに男女とも組の中が二つに分かれた。もっともそれぞれが一つの組を作るのではなくて、受験に関係のない科目の時だけ二つに分かれるのである(しかも同じ教室の中で)。例えばソロバンの時間には、就職組の方は先生の指導の下でソロバンの勉強に励むが、進学組はソロバンをやらないで、その代わりに受験勉強に精を出すという具合である。先生の読み上げの声や、ソロバンの玉のぱちぱちいう音を聞きながら、進学希望者は参考書をひもとくとか、入学試験問題集を開いて問題を解くとかといった勉強をするのである。ソロバンを中止して時々先生